

第625回番組審議会報告
2018年2月6日開催

■出席委員

佐藤卓己委員長 佐藤友美子副委員長 今井美樹委員
太平信恵委員 津村記久子委員 中野健二郎委員（書面）
東野博昭委員 細見良行委員 丸山雅也委員

■毎日放送出席者

三村社長 梅本専務 木田常務 浜田取締役 宮田取締役
黒田取締役京都プロジェクト室長 本郷プロデューサー
大牟田コンプライアンス室長兼番組審議会事務局長

◆議事の概要

テレビ番組『京都知新 新春スペシャル』

(2018年1月1日（月・祝）7:30～8:25放送)

について意見交換した。

【各委員の主な意見は次の通り】

- *職人や芸術家など、人にフォーカスを当てて京都の伝統や新しさを紹介する番組の正月スペシャル版。全体に美しく上品な印象を持った。
- *正月番組といえば、まず琴の音色が流れて、いわゆる“新春を寿ぐ”という、ワンパターンに辟易してしまうが、音楽等での正月要素が抑えてあってホッとした。
- *ガラスペン職人、鬼瓦職人、書家らを紹介していたが、エピソードの変わり目がわかりにくかった。また、それぞれもう少し長く見たかった。
- *俳優の升毅さんとMBSの豊崎由里絵アナウンサーが進行役をしていたが、料理の紹介など、コメントが平凡で、特徴がない。従来の料理番組の感想と変わらず、この番組の良さを消している印象があった。
- *毎日放送の良心のような番組で、クラシックを多用する音楽の趣味がいい。

- * 番組の冒頭、進行役の二人がいる柚子屋旅館に一気に上がって中に入っていくカメラワークがとてもよかった。
- * 97歳のガラスペン職人の「楽しいのは仕事だけ」という言葉は、凄味がある。
- * “京都圧”みたいなものをかけたい番組だと思うが、そのねらい通り、暑苦しいほどにその“京都圧”を感じた。番組の最後で升さんが柚子屋旅館の柚子風呂に入っているシーンはほっとした。
- * 番組冒頭でせっかくおいしそうなお節料理が並んでいるのに、あまり触れず、進行役二人が互いのプライベート話に終始していたのは残念。
- * VTRで紹介した職人さんが作ったかんざしを豊崎アナウンサーがさしていたのに番組の中でふれないのはもったいない。
- * お正月にふさわしくおめでたい要素が詰まったよい構成だ。毎週放送している15分間のレギュラー番組「京都知新」とは、別ものと考えて見たほうが良いと感じた。
- * 升さんが柚子湯につかるシーンは、現場が柚子屋旅館だということに引っ掛けたのかもしれないが、柚子湯イコール冬至というイメージが強いのので、年末っぽい感じがした。
- * 島原の太夫さんが登場したが、お正月ならではの不思議な世界。ただ、少し重い感じがした。
- * 「京都知新」のスペシャル版ということで、レギュラーの「京都知新」の内容を詰め込みたくなると思うが、この番組に関してはもう少しそぎ落とすことをやったほうがよかったのでは？
- * 京都の職人さんの技術はその人のみならず、裏でその人を支える人間関係みたいなものもあってのものだと思うので、その辺にも触れてほしかった。
- * 「伝統の上に立った新しさ・若さ」という番組の趣旨はわかるが、それがたちまち「京都ブランド」と誤解されると困る。そこは露出の仕方を工夫して欲しい。

【番組制作者側の説明、質問への回答】

- *音楽に関して、レギュラー番組では雅楽以外のかっこいい音楽をつけている。職人の方々を紹介するVTRには、ある意味、前衛的だったり、自分の感覚でかっこいい曲をつけている。今回敢えてクラシックにしたのはふだんの選曲に飽きたから。逆にオーソドックスなクラシックの音楽をつけるというのはある意味冒険で、京都を外して、敢えてベタな曲にした。
- *職人の方を紹介するVTRは、レギュラー番組では12分ぐらい。今回のスペシャルでは、その中身から3分、4分のいいところ取りをしている。欠落する部分はやはり出てきて、たぶん消化不良な感じがあるかなと思う。
- *島原の太夫を取り上げたのは「日本文化の代表として着物とかんざしと帯を含めたところをもっと紹介して欲しい」という彼女たちの声があったため、今後の「京都知新」で太夫を教養ある文化人として特集する回の予告の意味もあった。
- *柚子風呂については賛否両論あると思う。升さんは面白い方で、別にお願していないのに、カメラが回るとご自身から湯船に潜られた。演者さんの奮闘に、放送しないわけにはいかなかった。

以上